

菅原孝標女著、ソーニャ・アンツェン、伊藤守幸翻訳

『注解 更級日記——十一世紀日本の或る女性の一生』

Sugawara no Takasue no musume. *The Sarashina Diary: A Woman's Life in Eleventh-Century Japan*, translated with an introduction by Sonja Arntzen and Iro Moriyuki. Columbia University Press, 2014

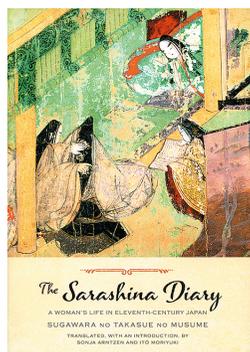
トウンマン武井典子

このたび『更級日記』の新しい翻訳が出た。ソーニャ・アンツェン氏と伊藤守幸氏の十年近くにわたる共同作業が実を結んだものだ。アンツェン氏はブリテイッシュユークロンビア大学の平安女性文学研究者で、以前『蜻蛉日記』を英訳している。伊藤氏は二十年にわたる『更級日記』の研究者だ。海を越えた二人の研究者の幸福な共同作業が今回のこの出版となった。

翻訳は、秋山虔校注の『更級日記』（新潮社、一九八〇年）に基づき、十三世紀の藤原定家の御物本の影印版と、御物本の原本を参照しつつ行われた。『更級日記』はこれまでも翻訳が出ているが、今回の翻訳は翻訳だけでなく、最近の研究成果に基づいた日

記文学論や作品論が大きな比重を占めているのが特徴だ。前半は作者と作品についての解説、そして作品研究で占められている。書名のサブタイトルが「翻訳と紹介」とあるがこの内容をよく反映している。

和歌の翻訳については、表示を五行分けにしたこと、五、七の音節数に訳せなくとも、できるだけ五・七の長短行にするようにしたこと、また可能な限りイメージの出てくる順番を尊重したことが述べられている。和歌はこれまで二行訳の例が多かったが、アンツェン氏は『蜻蛉日記』訳でも用いた五行分けにしている。その理由としては、この行分けで五・七・五・七・七の形式を視覚



的に表現するためだと述べている。和歌は連想、暗示や音の魅力が翻訳では表現しがたいことが多いが、この行分けは、読者にとって各句のあとの休止符の役割を果たし、ゆっくり読む助けになるだろう。各句の言葉、イメージ自体に読者の注意をひき、詩的価値を伝えるためには有効な手段ではないか。和歌英訳の際、今後五行訳が定着するかどうか興味深い問題だ。

まず、第一章は「テキストと作者」で始まるが、ここで平安女性日記文学が、男性の書き手による漢文の日記と私家集の二つの源泉から派生したことについての概説がある。これは広い読者層に、『更級日記』の日本文学内での位置を語り、読者の理解を助けるのに役立つだろう。続く作者菅原孝標女とその家系の章では、中流貴族ながら菅原道真の遠縁にあたること、また『源氏物語』の作者紫式部は継母の遠縁にあたること、『蜻蛉日記』の作者藤原道綱母は作者の母の姉妹であることが指摘される。作者が当時の物語や日記を自分に近いものと受けとめる条件がそろっていたことが端的に紹介されている。作者の東国での子ども時代とその一生に関する簡略な説明が、作者の日記のモチーフの選択や内容を理解させてくれる。すべてこれらの導入部分はあとに続く作品論の前提として必要な部分だ。

第二章「テーマと構成」では、これまでも指摘されてきたように、作品中に共存する散文的章段と叙情的・家集的章段の指摘

があり、特に東山の段は、家集的・叙情的な段として解説されている。作者は十八歳の四月から秋までを東山にひきこもって暮らすのだが、そこに訪ねてくる人のあつたこと、叙情的な歌のやりとりなどから、読者としては隠れた恋の物語を想像したくなる、魅力的な解説だ。²⁾

第三章「夢と宗教的自覚」では、全編にある宗教的な記述が特に作者の見る夢に現れていることから、その十三の夢についての解説がある。物語が仏教側からは娯楽として蔑視されていたこと、その物語への耽溺と宗教心との葛藤が夢となつていること、また初夢に出てくる天照大神は作者の無意識に深く隠れている信仰をなおざりにしているという意識とともに作者の朝廷へのあこがれ、勤めに出ることにより世の人々の中に出たいという現世的願望を表現しているのだという訳者の分析には説得力がある。³⁾ 当時の仏教信仰は現世での幸福を願うものだったことも指摘されるが、当時の女性の菩薩信仰についての解説もある。女性たちは巡礼で清水寺、初瀬、石山寺へ行くのが慣例だったが、これもすべて作者が巡礼に訪れたと日記に書いているところだ。

第四章「子どもの視点と語りの諸層」では、東国育ちだった作者の十三歳の視点から日記が始まること、この東国と都へのあこがれの二重性が作者の価値観を当時の都からの視点とは違ったものになっていること、テキストから見えてくる作者の孤独感、書い

ている時点の作者と書かれている時点の作者のペルソナについて説かれる。

作者の自分のことをすべて見せないような日記の書き方（例えば結婚と出産）と物語への異常なまでの耽溺、東山滞在中の孤独感から自然への詩的な傾倒など、読者を魅惑するに足る人柄について、言葉の壁を越え、十一世紀の女性ということを忘れさせるような魅力を伝えてくれる解説だ。

特に重要なのは第五章の「テキストとインターテキスト」だ。ここで、物語や日記、私家集の読者としての作者が論じられる。『蜻蛉日記』の冒頭には、世にある古物語はそらごとであること、だから自分のつまらない身の上でもそのまま書けば、本当の貴人と一緒になってどんな暮らしなのかを人にも知ってもらえるだろう、とある。これはフィクションに対して、日記の真实性を主張している、と訳者は読むのだが、さらに『源氏物語』は、この『蜻蛉日記』のフィクション批判に応えるものであり、フィクションでありながら写実的な心理描写で人間関係を描いたものだったのだ、という。『更級日記』の作者はのどちらも読み込んでいたよき読者だったが、作者としては、『蜻蛉日記』や『源氏物語』を意識して日記文学というジャンルに文学的なフィクション性を取り込もうとして『更級日記』を書いたのではないかというのが訳者たちの理解だ。

『更級日記』は日記文学に心理的リアリズムと同時に文学的フィクション性を意識的に導入しようとした作品という訳者の理解には説得力がある。特に「語られなかった出来事たち」、例えば、『蜻蛉日記』では中心的なテーマだった夫との確執や我が子への言及が『更級日記』にはまったくなく、自分の結婚や出産について何も書いていないのだ。訳者はその他にも菅原道真への言及が皆無なこと、定家によれば物語の作者でもあったのに、それについては何も日記に書いていないことを重要な省略と指摘している。これは『更級日記』がただ忠実な作者の人生の記録ではなかったことを雄弁に語っている。そして、歌の贈答があり、一部は歌の詩的な感興が主目的と思われる部分もある。東山の段がそれであり、また御所の夜、作者と同僚の官女が源資通と出会い、どの季節が一番好ましいかについて歌のやりとりをする挿話もそうだ。特に後者は『源氏物語』の季節談義を思わせる叙情的な美しい段だ。

そして日記は前述のとおり旅日記のように、作者の東国から都への旅で始まる。十三歳から、夫に先立たれた哀しみに沈んでいた五十三歳までのことを、思い出しながら書くという形式だ。ところどころ、書いている時点での作者のコメントが、例えば、もっと信仰深く暮らすべきだったなどとあるが、全体は作者が選んだ記憶からなっている。

物語に陶醉する作者と仏の夢を見て、もつと信心深くならなくてはと己を諫める作者の二つの姿が読者の前にある。訳者は宗教的反省と詩的文学性の矛盾する拮抗に『更級日記』の深い意味を見るのだが、『更級日記』を書いた作者は何をおいても日記というジャンルに自分の文学的足跡を残したかったのではなかろうか。これは一読者としての筆者の読後感想に過ぎないが、いろいろな方向に読まれる可能性と矛盾を内蔵している『更級日記』を、訳者たちはクリスタルのプリズムに喩え、また音楽の対位法に比している。

今回の英訳出版で文学的感性、教養豊かな十一世紀に生きた一女性の声が時を越え、言葉の壁を越えて現代の読者に語りかけてくれる可能性がまた新たにできた。長年の共同作業の結実と言えるのだが、また最新の研究成果に基づいた作品論は日本文学研究だけでなく、広く英語圏の読者にこの十一世紀の女性日記文学を紹介するのに貢献することを期待したい。

注

- (1) 例えば、テイラー訳 *The Tale of Genji*, New York, London: Viking, 2001.
- (2) 本書三三頁註五参照。稲賀敬二「孝標のむすめの初恋の人は「しづくににじるひと」か」『国語と国文学』一九六八年十二月、九〇―一九頁。
- (3) 本書三六〇―四〇頁、「Worship Amaterasu, "Worldly Ambitions" 参照。